

## 日本語教育の読解教材における「こと」の分析

坪根由香里

キーワード：こと 新書ライブラリー 読解教材 用例分類 文型

### 1. はじめに

日本語の授業で学習者の読解教材を選択する際、その教材にはどのような日本語が使われているか、どのくらいの日本語力があれば読める文章なのかを把握することは重要である。そのためには教材に含まれている語彙や表現を調査することが必要である。そうすることで、その教材で学習すればどのような言葉に触れるのかについて、ある程度の把握ができることになる。

鈴木(1998a)では「新書」を素材とした読解教材<sup>1)</sup>について漢字や語彙の量的な調査を行い、また鈴木(1998b)では同教材の中にどのような「表現」<sup>2)</sup>が含まれているかを量的に明らかにしている。鈴木(1998b)によると、「こと」は形式名詞の中で「もの(みえないもの)、よう(様態)」とともに度数、頻度ともにぬきんで多く、学習者はこれらを使った文を多く認知し、言語処理している。また、工藤(1998)では同教材における高頻度名詞を調査しているが、その資料においても「こと」は8テキスト中7テキストにおいて1、2番目の高頻度になっている。

しかしながら、「こと」は様々な意味、機能を持っており、他の語と結びついて慣用的に用いられる場合や、構文としてとらえた方が良いものもあり、テキストで用いられている用例についてさらに詳しく分析する必要がある。学習者は文脈の中で複数の「こと」の意味、機能から正しい「こと」の意味、機能を選択し、テキストを理解しなくてはならず、それが読解を困難にしているひとつの要因となっている可能性がある。

本稿では上記教材の中で使われている「こと」の用例を分析し、新書の中でどのような「こと」の表現がどれくらい使われているかを調査したい。同時に木坂(1988)にしたがって「こと」の用例を分析し、近代小説について「こと」を含む文を6種12類の文型に分類した木坂(1988)の結果と比較しながら、新書の文章の特徴を考察する。

### 2. 分析資料

本調査は、表1に示す8種のテキストを対象に行った。これは、鈴木（1998a）で開発された読解教材『新書ライブラリー』の素材で、総文字数約67,000字程である。なお、表1の「文体」は工藤（1999）の分類を使用した。

表1 「新書ライブラリー」のテキスト一覧

| 書名        | ページ      | 分野           | 文体                    |
|-----------|----------|--------------|-----------------------|
| タテ社会の力学   | pp.12-20 | 日本人論・日本文化論   | 論述（専門的） <sup>3)</sup> |
| タテ社会の人間関係 | pp.26-42 | 日本人論・日本文化論   | 論述（専門的）               |
| まなざしの人間関係 | pp.7-28  | 言語とコミュニケーション | 論述・記述混在               |
| 「ゆとり」とは何か | pp.12-34 | 経済・経営        | 論述                    |
| 働くということ   | pp.9-21  | 人生論・教育       | 論説                    |
| 稟議と根回し    | pp.20-30 | 経済・経営        | 論述                    |
| 敬語を使いこなす  | pp.8-43  | 日本語          | 解説（話し言葉的）             |
| 睡眠の不思議    | pp.12-38 | 自然科学と技術      | 記述（専門的）               |

### 3. 調査1：新書における「こと」表現の出現頻度及び用例分析

#### 3.1. 調査の方法

8つのテキストから「こと」が使用されている用例をすべて抽出し、それを「Nのこと」「ことができる」といった出現形別、「時の設定」「能力」といった意味・機能別に分類し、出現頻度を調べる。その中の慣用的な表現については、3テキスト以上で使用されているものを取り出し、用例を分析する。

#### 3.2. 「こと」の意味・機能別分類の枠組み

「こと」は実質名詞、形式名詞、助動詞化した文末の「こと（だ/だろう）」の3つに大きく分けられる。

実質名詞は「人間生活の中で生起する事件や事態を指す」もので、例えば「事の起こりはこうだ」のようなものである（森田1988）。

形式名詞については、森田（1988）は「いわゆる形式名詞としての用法」「文や句を体言化する『こと』」に分類し、後者の中からさらに「慣用的な言い回し」を取り出している。森田は、「いわゆる形式名詞としての用法」を、それだけでは漠然としているが、上にくる連体修飾語の働きによって「こと」の内容が具体的なものとなるもの、「文や句を体言化する『こと』」を用言的な状態形容を体言的概念に変える働きのものとし、後者の「こと」は多く「の」と置き換えが可能であるとしている。「慣用的な言い回し」とは「ことができる」「ことになる」

のような特殊な固定した言い回しのことである。以下に森田の例を示す。

- (1) ちょっとしたことが原因で二人は仲たがいでいる。  
どういふことでしょうか。私でわかることなら何でもお話しいたしましょう。  
（以上「形式名詞」の例）
- (2) 近くに家がなくて閑静なことが何よりもありがたい。  
コレステロールの蓄積をおさえることが肝要だ。（以上「体言化」の例）
- (3) 補助券十枚で一回福引きを引くことができます。  
三月末日をもって退社することになりました。  
（以上「慣用的な言い回し」の例）

助動詞化した文末の「こと（だ/だろう）」は、形式名詞の「こと」+「だ/だろう」ではなく、「ことだ」全体でモダリティを持つものとしてとらえたほうがよいもので、「田中さんが幸子さんと結婚することだ。」「大学に入りたいのなら、一生懸命勉強することだ。」のようなものである（坪根 1996）。

本稿では、上記先行研究を参考にして、1. 実質名詞、2. 形式名詞に大分類し、2. 形式名詞を a. 「いわゆる形式名詞の用法」 b. 「体言化用法」 c. 「慣用的表現」に小分類することにする。ここでいう「慣用的表現」とは、「日本語教育において『こと』単独の意味・機能ではなく、他の要素と結合した形で提示する必要があるもの」を指すこととし、その意味では「助動詞化した文末の『こと（だ/だろう）』」も「慣用的表現」に含まれるため、両者を一括して「慣用的表現」とする。

以下に例を示す。なお、テキスト名は表 2 の省略形で表す。

1. 実質名詞：一丸となってことにあたるか、（『タテ力学』）
2. 形式名詞
  - a. いわゆる形式名詞の用法：なかなかわからないことが多いものである。  
（『ゆとり』）
  - b. 体言化用法：それは“権利”の分配が著しく平等化されたことを意味する。  
（『ゆとり』）
  - c. 慣用的表現：精神の安定をうることができる。（『衆議』）  
これでは、目を開けて外を見ていないと、うっかり乗り過ごしてしまうことであろう。（『まなざし』）

### 3.3. 調査の結果

調査の結果、8つのテキストに表れた「こと」の用例は全部で 361 例、うち実質名詞としてはほとんど使用されず（2 例）、ほとんどが形式名詞（359 例）であった。形式名詞の中では、いわゆる形式名詞の用法は 55 例と比較的少なく、

表2 「新書ライブラリー」中の「こと」の用例分類

| 意味・機能            | 出現形         | タテ<br>力学 | タテ<br>人間 | まな<br>ざし | ゆと<br>り | 働く | 楽談 | 敬語 | 睡眠 |     |
|------------------|-------------|----------|----------|----------|---------|----|----|----|----|-----|
| 1. 実質名詞          | こと          | 1        |          | 1        |         |    |    |    |    | 2   |
| 2. 形式名詞          |             | 14       | 53       | 56       | 73      | 23 | 25 | 64 | 51 | 359 |
| a. いわゆる形式名詞の用法計  |             | 2        | 8        | 8        | 21      | 3  | 0  | 11 | 2  | 55  |
| いわゆる形式名詞の用法      | Nのこと        | 1        | 1        | 2        | 4       | 1  |    | 2  |    | 11  |
| いわゆる形式名詞の用法      | 指示詞+こと      | 1        | 2        | 4        | 4       | 1  |    | 1  | 1  | 14  |
| いわゆる形式名詞の用法      | Adj/AN+こと   |          | 1        | 1        | 12      | 1  |    | 1  | 1  | 17  |
| いわゆる形式名詞の用法      | 文+こと        |          | 4        | 1        | 1       |    |    | 7  |    | 13  |
| b. 体言化用法計        | 文+こと        | 2        | 20       | 18       | 19      | 10 | 15 | 11 | 16 | 111 |
| c. 慣用的表現計 (34項目) |             | 10       | 25       | 30       | 33      | 10 | 10 | 42 | 33 | 193 |
| 意味・定義            | Nのこと*       |          |          | 1        | 4       |    |    |    | 1  | 6   |
| 個体の「こと」化         | Nのこと*       |          | 2        | 1        | 2       |    |    | 7  | 1  | 13  |
| 時の設定             | Nのこと*       |          |          | 4        | 2       | 2  |    |    |    | 8   |
| 意味・定義・解釈         | Nということ      |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 抽象化・一般化          | Nということ      |          | 1        |          |         |    |    |    |    | 1   |
| 内容               | Nということ*     | 1        | 2        |          | 1       |    |    | 1  |    | 5   |
| 意味・定義・解釈         | 文ということ*     | 2        |          |          | 5       |    | 1  | 1  |    | 9   |
| 抽象化・一般化          | 文ということ*     |          |          | 4        | 1       |    |    | 1  |    | 6   |
| 内容               | 文ということ*     | 1        | 6        |          | 4       |    | 1  | 3  | 1  | 16  |
| 「～ないで」の意味        | ～ことなく       |          | 1        |          | 1       |    |    |    |    | 2   |
| 後件を批判的に述べる       | ～ことであって     |          | 1        |          |         |    |    |    |    | 1   |
| 理由               | ～こともあって     |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 「～の場合は」という仮定     | ～ということになると  |          |          |          |         |    | 1  |    |    | 1   |
| 前もって気持ちを表す       | ～ことに        | 1        |          |          |         |    |    |    | 1  | 2   |
| 接続詞的使用：原因/結果     | ～ことので       |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 可能性              | ～ことができる*    | 4        | 3        | 7        | 3       | 1  | 5  |    | 9  | 32  |
| 能力               | ～ことができる*    |          |          | 2        |         | 1  |    |    | 1  | 4   |
| 決定               | ～ことにする*     |          | 2        | 4        |         | 1  | 1  | 7  | 3  | 18  |
| 決定               | ～ことになる      |          |          |          |         | 1  |    |    | 1  | 2   |
| 結果               | ～ことになる*     | 1        |          | 2        | 1       |    |    | 6  | 3  | 13  |
| 言い換え             | ～ことになる      |          |          |          | 2       |    |    |    | 2  | 4   |
| 婉曲               | ～ことになる      |          |          |          |         |    |    | 3  |    | 3   |
| 取り決め             | ～ことになっている   |          |          |          |         |    |    | 2  |    | 2   |
| 否定               | ～ことはない      |          |          |          | 2       |    |    |    |    | 2   |
| 「～必要はない」の意味      | ～ことはない      |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 経験               | ～ことがある/ない*  |          | 1        | 1        | 1       | 2  |    |    |    | 5   |
| 過去の出来事の提示        | ～ことがある/ない   |          |          |          | 1       | 1  |    |    |    | 2   |
| 時々生じる出来事         | ～ことがある/ない*  |          | 3        | 3        | 2       |    | 1  | 3  | 10 | 22  |
| その可能性、場合がある      | ～ことはある      |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 解説               | ～ことだ        |          | 3        |          |         |    |    |    |    | 3   |
| 伝聞               | ～ことだ        |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 推測               | ～ことだろう*     |          |          | 1        |         | 1  |    | 1  |    | 3   |
| 感嘆               | ～なんと～ことだろうか |          |          |          | 1       |    |    |    |    | 1   |
| 丁寧               | ～こと         |          |          |          |         |    |    | 1  |    | 1   |
| 総計               |             | 15       | 53       | 57       | 73      | 23 | 25 | 64 | 51 | 361 |

\*は3つ以上のテキストで出現しているもの

体言化用法、慣用的表現がそれぞれ 111 例、193 例と多いことがわかる。意味・機能別の分類では、34 項目の慣用的表現が抽出された（表 2）。

抽出された慣用的表現のうち 3 つ以上のテキストで用いられているものは 14 項目（\*の付いた項目）である。最も多くのテキストに出現しているのは「ことができる（可能性）」（7 テキスト）、次に多いのは「文ということ（内容）」、「ことにする（決定）」、「ことがある／ない」（6 テキスト）である。

これらの 14 項目は、1) 「N のこと」2) 「N / 文ということ」3) 「ことができる」4) 「ことにする」5) 「ことになる」6) 「たことがある／ない」7) 「ることがある／ない」8) 「ことだろう」の 8 項目に集約される。

### 3.4. 用例の分析

上記 14 項目の慣用的表現のうち、「ことだろう」以外は全て日本語能力試験の 3 級レベルである。しかしながら、これらは同じ形でも文脈の中で異なった意味、機能を持つ場合があり、必ずしも 3 級レベルの知識があればすべて理解できるものではない。以下では、これらの用例を中心に上記 8 つの表現について見ていく。

#### 1) N のこと

①意味・定義：例) 「まなざし」とは・・・対象に向ける目の様子のことであった。（『まなざし』）

②個体の「こと」化：例) 自分の家庭のこと、恋人のことなどを同僚に語る者が日本人にはいかに多いか、（『タテ人間』）

③時の設定：例) わたしがイタリアで生活しはじめて間もないことのことである。（『まなざし』）

「N のこと」①は下記の「N / 文ということ」とともに「～と（いうの）は～ことだ」の構文で意味・定義を表す。『ゆとり』では「中産階級とは」「豊かな社会とは」「国が発展するということは」等、ゆとりに関連した事項についての定義に使われ、特に多くなっている。②の「個体の『こと』化」というのは、その存在物自体しか表さない N に「こと」を付けることで N に関する事柄を表すようにするものである。例えば上の例では「恋人」という存在物に「こと」が付いて「恋人に関すること」の意味になっている。思考作用、発話行為、一部の感情表現の動詞が共に使われる（江田 1987）。特に『敬語』では敬語使用の場面で「話し手が自分のことを言う」のような形で多く使われている。③は冒頭で以下に述べる話を「こと」に代表させて予告をすると同時に、それが確かに語られる事実であることを冒頭で定着させるものである（木坂 1988）が、これから話す出来事の時を設定する場合だけでなく、前に述べた出来事の時に話の後で設定する場合

もある。

## 2) N／文ということ

①意味・定義・解釈：例)「豊かな社会」とは・・・生活に困ることがなくなった、ということである。(『ゆとり』)

②抽象化・一般化：例)視線を合わすことは、わたしたちが人間関係を結ぶうえで、もっとも基本的なしぐさのひとつであろう。(『まなざし』)

③内容：例)どこもまちがっていないものも入っているかもしれない、ということをお断わりしておきます。(『敬語』)

②は先行する具体的なN／文の内容を「ということ」を付けることで抽象的概念にするもので、③は出来事の内容に続けて使い、「という」が引用的に用いられるものである。

## 3) ことができる

①可能性：例)社会の規制からのがれることができるなら、(『睡眠』)

②能力：例)わたしはだんだん適応することができるようになっていた。

(『まなざし』)

可能性、能力の有無を表す。「可能性」の用例の方が圧倒的に多い。

## 4) ことにする

①決定：例)第5章において・・・詳しく論ずることにする。(『タテ人間』)

これから行う事柄についての決定を表す。新書の中では上記の例のように、話の展開場面で、後に来る事柄の提示に用いられることが多い。テキストの内容の中での決定・取り決めを述べる場合もある。例えば、『敬語』では「正解／零点ということにします」のような正誤判断に関する決定の場面で多く使われている。

## 5) ことになる

①決定：例)自分がいかなる労働に従事することになるかについては五里霧中の状態であった。(『働く』)

②結果：例)不平不満やうらみつらみを心に抱いても、それを言動に表わせば、「文句があったらやめてくれ」ということになり、(『ゆとり』)

③言い換え：例)眠りとはなにかを知るとは、生きているとはなにかを知ることにもなるはずであろう。(『睡眠』)

④婉曲：例)直してないものはマイナス二点ということになりますが、敬語とはなかなかむずかしいものであります。(『敬語』)

上記の「ことにする」と対応しているが、「ことになる」の方は決定の意味から派生して様々な意味を持つ。特にその他動性のため、②の結果の用法を④のように婉曲的に述べるために用いられる場合がある。『敬語』は読み手に話しかけるような文体のため、「マイナス二点です」のような直接的な言い方でなく、「採

点基準があり、その結果としてこうなるんだ」という言い方を使って、柔らかい印象にしている。同様に、③の言いかえの用法も「ことになる」を使うことで婉曲的にし、緩い定義を表すようになっている。

#### 6) たことがある／ない

①経験：例) ある雑誌に次のような趣旨を述べたことがある。(『ゆとり』)

②過去の出来事の提示：例) 暴動が、都市から都市へと飛び火したこともある。  
(『ゆとり』)

「たことがある／ない」は経験の有無を表すが、ここでは、個人の経験ではなく、過去にそのような出来事があったことを示す用例(②)を分けた。

#### 7) ることがある／ない

①時々生じる出来事：例) うまれたてのときは、いきなりレム睡眠からはじまることがあるが、(『睡眠』)

『睡眠』では上記例のように、睡眠状態の記述において多く用いられている。

#### 8) ことだろう

①推測：例) お気に召さない方もおありのことでしょう。(『敬語』)

「ことだろう」の機能は「いたわり」「感情移入」などがあると言われるが、それ以外の機能がある可能性も考えられ、さらに深く考察する必要がある。よって、現時点では一括することにする。なお、上記の例は「いたわり」と言われる例である。

## 4. 調査2：新書における「こと」文型出現状況と「こと」の出現頻度

### 4.1. 調査の方法

8つのテキストから抽出した「こと」の用例を、木坂(1988)で提示されている6種12類の文型を参考に、7種の文型に分類する。木坂(1988)は、近代小説についての調査のため、地の文と会話文に分けて分類されているが、本研究では一括する。分類に使用する文型は以下の通りである<sup>4)</sup>。以下、「V」は動詞型述語、「A」は形容詞型述語、「N」は名詞を表す。

I ~ことが(は・も)+V

例：論理的なつながりを見出すことができるのである。(『タテ力学』)

II ~ことを(も)+V

例：それは、「権利」の分配が著しく平等化されたことを意味する。(『ゆとり』)

III ~ことに(と)+V

例：私は、半生をつねに高度成長とつきあってきたことになる。(『ゆとり』)

IV ~ことが(は・も)+A

例：なかなかわからないことが多いものである。(『ゆとり』)

V ~ことが(は・も・の)+ある・ない

例：インド人が、筆者に不思議そうにたずねたことがある。(『タテ人間』)

VI ~こと+である・だ・だろう・であろう<sup>5)</sup>

例：・・・好んでするのは、・・・場を優先することである。(『タテ人間』)

VII ~ことが(は・も)+Nである・だ・だろう・であろう

例：この眠りの評価がいまだに定まらないことがその原因である。(『睡眠』)

## 4.2. 結果と考察

### 4.2.1. 「こと」文型出現状況

まず、新書について調べた本研究を、木坂(1988)の小説についての調査と比較してみる。表3はテキスト別に各文型の数をまとめたものである。なお、実質名詞、接続詞的用法(ということ)、終助詞的用法(~こと)は数に含めておらず、計358例である。木坂(1988)における各文型の合計数(地の文のみ)と全用例に対するその割合を表最下部に示した。また、新書、小説それぞれの文型別割合をグラフにしたものが、図1、2である。

これらを見ると、小説では第Ⅱ文型(~ことを+V)が最も使用割合が高く、次いで第Ⅰ文型(~ことが+V)、第Ⅴ文型(~ことが+ある/ない)の順になっている。一方、新書では第Ⅵ文型(~こと+だ/だろう)、第Ⅰ文型(~ことが+V)、第Ⅲ文型(~ことに+V)の3つの使用が多い。共通して多く使用されている文型は第Ⅰ文型で、「~ことが+V」という文型はテキストのタイプにかかわらず、比較的多用されるものだと言える。反対に大きく異なっているのは、小説では第Ⅱ文型(~ことを+V)が多く使われているが、新書では小説の半分強の割合しかない点、逆に小説で使用割合が高くない第Ⅲ文型(~ことに+V)、第Ⅵ文型(~こと+だ/だろう)が、新書ではそれぞれ小説の約1.7倍、約1.5倍の使用割合になっている点である。

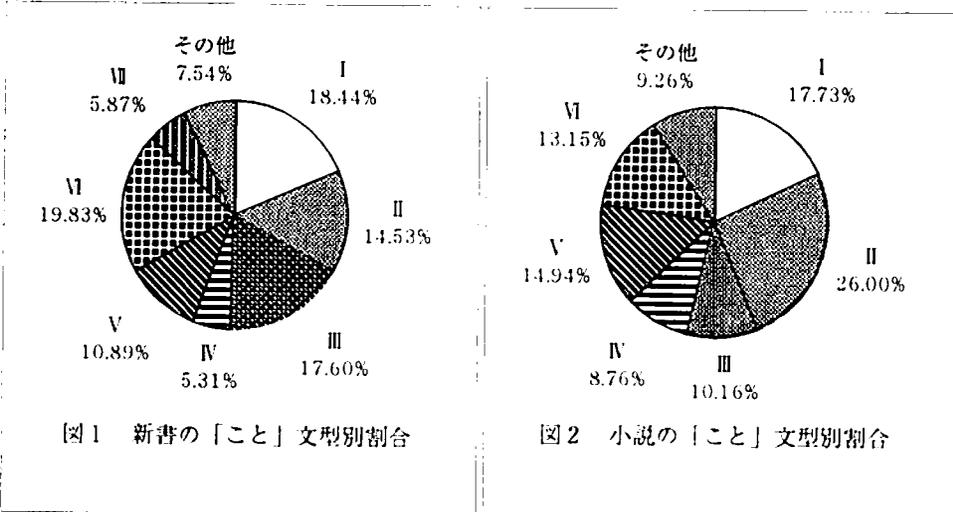
木坂によると、「「そんなことを云う」の形で会話のト書きに多用」されるため、小説では第Ⅱ文型が多くなっており、これは小説の特徴と言える。「こと」の前に動詞型連体修飾語が来るか、形容詞型連体修飾語が来るかで分類してみても、小説の第Ⅱ文型では形容詞型連体修飾語が動詞型連体修飾語の1.5倍の使用が見られ(木坂1988)、第Ⅱ文型・形容詞型連体修飾語の割合は新書の場合の3倍であった。一方、新書で第Ⅲ文型が多いのは「ことにする」「ことになる」が多く使われるためであり、第Ⅵ文型が多いのは小説と比べ一般的事実を断定的あるいは推量的に述べるが多いためだと考えられる。

第Ⅰ文型と第Ⅱ文型は「自動性、他動性の差異によって、自然的自発的表現と意図的主体的表現のちがいとなってあらわれる」(木坂1988)ものであるが、新

表3 「新書ライブラリー」中の「こと」文型別出現数

| 書名\文型   | I     | II    | III   | IV   | V     | VI    | VII  | その他  | 合計   |
|---------|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|------|------|
| タテ力学    | 7     | 1     | 1     |      |       | 2     | 1    | 2    | 14   |
| タテ人間    | 7     | 5     | 7     | 1    | 6     | 20    | 7    |      | 53   |
| まなざし    | 13    | 11    | 11    | 2    | 5     | 9     | 2    | 4    | 57   |
| ゆとり     | 10    | 13    | 3     | 5    | 8     | 25    | 4    | 5    | 73   |
| 働く      | 3     | 7     | 2     |      | 3     | 5     |      | 3    | 23   |
| 稟議      | 8     | 5     | 5     | 3    | 1     | 2     | 1    |      | 25   |
| 敬語      | 3     | 8     | 24    | 4    | 6     | 5     | 1    | 11   | 62   |
| 睡眠      | 15    | 2     | 10    | 4    | 10    | 3     | 5    | 2    | 51   |
| 合計      | 66    | 52    | 63    | 19   | 39    | 71    | 21   | 27   | 358  |
| 割合(%)   | 18.44 | 14.53 | 17.60 | 5.31 | 10.89 | 19.83 | 5.87 | 7.54 |      |
| 小説合計*   | 178   | 261   | 102   | 88   | 150   | 132   | —    | 93   | 1004 |
| 小説割合(%) | 17.73 | 26.00 | 10.16 | 8.76 | 14.94 | 13.15 | —    | 9.26 |      |

\*小説の数値は木坂(1988)より



書では自然的自発的表現である第I文型の方が、小説では意図的主体的表現である第II文型の方が多くなっている。新書は客観的記述を求められるため、意図的主体的表現が小説ほど多くはないのではないかと推測され、新書の文の方が抽象性の高い文になっている可能性がある。

次に文体別に見てみる。テキストの数が8つと少ないので、一般化することはできないが、特徴的なのは論説文の『働く』と解説文の『敬語』では第I文型(～ことが+V)が少ないことである。前者は全体の「こと」の数が少なく、第II文型(～ことを+V)がやや多くなってはいるが、「こと」文型の使用にばらつきが見られる。後者は第III文型(～ことに+V)が他の文型と比べて極端に多くな

っている。『敬語』は敬語の問題について正解を示し、解説していく形式をとっており、テキストが話し言葉で書き進められているため、3-4でも述べたように「正解ということにします」のような正誤に関する解説、決め事を表す表現や、「直してないものはマイナス二点ということになります」のような婉曲的表現が多く使われている。その他の論述文、記述文では、第I文型、第VI文型が多く使われ、「～ことが+V」「～ことである/だ/だろう/であろう」の形がこれらの文体において最も基本的なものだと言える。

#### 4.2.2. 「こと」の出現頻度

「こと」は新書の中でどれぐらいの頻度で現れるのか。テキストの長さが異なるため、文数に対する「こと」の割合（文数/「こと」数）を算出し、平均文長とともに表4に示した。

表4 「新書ライブラリー」中の「こと」の出現頻度

|                    | タテ人間  | 粟議   | ゆとり     | まなざし | タテ力学 | 睡眠   | 働く    | 敬語   |
|--------------------|-------|------|---------|------|------|------|-------|------|
| 平均文長(字)            | 74    | 81   | 46      | 42   | 61   | 43   | 54    | 38   |
| 「こと」総数             | 53    | 25   | 73      | 57   | 14   | 51   | 23    | 62   |
| 文数                 | 105   | 67   | 249     | 220  | 61   | 245  | 116   | 385  |
| 出現頻度<br>(文数/「こと」数) | 1.98  | 2.68 | 3.41    | 3.86 | 4.36 | 4.80 | 5.04  | 6.21 |
|                    | 出現頻度高 |      | ←-----→ |      |      |      | 出現頻度低 |      |

これによると、最も頻度の高い『タテ人間』ではほぼ2文に1つの割合で、最も頻度の低い『敬語』は6.2文に1つの割合で「こと」が使用されている。小説について調べた木坂(1988)では、最も頻度の高いものは横光利一の『機械』で2文に1つの割合だが、20の作品の「こと」出現頻度は大きくばらついており、18文に1つしか現れないものもある。小説の場合、作者の描写法によって短文をつなげていく場合もあり、新書の場合よりばらつきが出やすくなるのだろう。

木坂(1988)によると、夏目漱石の『文鳥』(16.1文に1つ)、川端康成の『伊豆の踊り子』(15.4文に1つ)などは極端な短文主義で、これらは「自分」や「私」の眼を通して次々と事実を積みあげていく方法をとっており、そこに前件の事実を一度概念化固定化して表現するという複文的な「こと」の入る機会が少なくなるということである。本研究において出現頻度の低い3テキストは、『敬語』が解説文、『働く』が論説文、『睡眠』が記述文で、それ以外の高頻度よりの5テキストは論述文である。話し言葉を使用し敬語について口述的に解説した『敬語』、筆者の経験に基づいて働くということについて説明した『働く』、睡眠について客観的事実を記述、説明した『睡眠』において、「こと」使用頻度が低いのは、「前件の事実を一度概念化固定化して表現するという複文的な『こと』の

入る機会が少な」いからであろう。

最後に「こと」の使用と平均文長との関係について考えてみる。文の長さは条件節、引用節、連体修飾節等様々な要素が関係するが、その中の一つの要素として「こと」の使用で複文になり、文が長くなるということが考えられる。「こと」使用と平均文長との関係が推測されるテキストは、出現率が高く平均文長の長い『タテ人間』『粟議』と、出現率が低く平均文長が短い『敬語』であろう。反対に『タテ力学』は「こと」の使用は多くはないが文長は比較的長く、これは「こと」の使用以外の要素によって長くなっていると考えられる。文の長さはテキストの内容理解の難易にも関係すると考えられ、指導する上では、その文の長さがどのような要素によってもたらされるのかを把握しておくことが必要であろう。

## 5. まとめ

本研究で明らかになったことを簡単にまとめる。

1) 新書の中で「こと」は実質名詞としての使用は少なく、形式名詞として用いられるものが多い。また形式名詞の中では、体言化用法、慣用的表現が多い。

2) 8つの新書テキストから抽出された慣用的表現は34項目で、これらは「こと」の意味・機能を知っているだけでは用法を正しく理解できず、固定した言い回しとして提示される必要がある。このうち最も多くのテキストに出現しているのは「ことができる(可能性)」、次に多いのは「文ということ(内容)」、「ことにする(決定)」、「ることがある／ない」だった。使用頻度の高い慣用的表現をまとめると、「Nのこと」「N／文ということ」「ことができる」「ことにする」「ことになる」「たことがある／ない」「ることがある／ない」「ことだろう」になる。

3) 文型は、小説では第Ⅱ文型(～ことを+V)、第Ⅰ文型(～ことが+V)、第Ⅴ文型(～ことがある／ない)の順で使用割合が高いのに対し、新書では第Ⅵ文型(～こと+だ／だろう)、第Ⅰ文型(～ことが+V)、第Ⅲ文型(～ことに+V)の順が多かった。

4) 小説では意図的主体的表現である第Ⅱ文型(～ことを+動詞)の方が多かったが、新書では自然的自発的表現である第Ⅰ文型(～ことが+動詞)の方が多い。

5) 論説文の『働く』と解説文の『敬語』では第Ⅰ文型が少なく、論述文、記述文では第Ⅰ文型、第Ⅵ文型が多く使われていた。

6) 最も頻度の高い『タテ人間』ではほぼ2文に1つの割合で、最も頻度の低い『敬語』は6.2文に1つの割合で「こと」が使用されているが、小説ほど頻度

のばらつきは見られなかった。

7) 本研究において「こと」使用頻度の低い3テキストは、解説文、論説文、記述文で、それ以外の高頻度よりの5テキストは論述文であった。

8) 「こと」の出現率が高く平均文長の長い『タテ人間』『稟議』と、出現率が低く平均文長が短い『敬語』については、「こと」の使用と平均文長との関係が推測される。

## 6. 今後の課題

本稿では8つのテキストについて、この読書素材が日本語教材としてどのような性格を持つかを、特に使用例の多い「こと」について明らかにした。その中で「新書」という範疇の読書素材の中の日本語使用の傾向についても、先行研究で明らかにされている小説の場合との違い、論述文、解説文、論説文、記述文といった文体による違いなどを考察してきた。しかしながら、本研究で扱ったテキスト数は少なく、結果を一般化するためには今後、新書の中でも様々な文体のものをさらに調査する必要があるだろう。

また、「こと」の他に上記教材の中で使用頻度の高いものとして「もの（みえないもの）」「よう（様態）」があった。これらについても、今後、その用例を分析していくつもりである。

## 注

- 1) この教材は、読書支援システム『新書ライブラリー』という名称で鈴木庸子他によって開発された読解教材で、日本語教育のためのデータベース CASTEL/J（日本語教育支援システム研究会が開発）に収録されている新書の記事を用いて、上級までの日本語教育課程を終了した日本語学習者が自律的に学習するためのものである。
- 2) 鈴木（1998b）は「表現」を「文章の中で機能的な役割をはたし、語彙的な知識だけでは意味理解が難しく統語的な知識が必要なもの」としている。
- 3) 「論述」と「論説」の区別は、前者が学術的根拠に基づいて論が展開されているもの、後者が筆者の経験に基づいてある事象を説明、解釈しているものである（工藤 1999）。
- 4) 木坂（1988）ではIからVIの文型を、「こと」の前に動詞型（助動詞を含む）連体修飾語が来るか、形容詞型（助詞「の」を含む）連体修飾語が来るかでさらに（A）（B）に分け、12類としている。
- 5) 木坂（1988）では「である・だ・だろう・であろう」を「存在詞」と表しているが、用語上「ある・ない」との混乱を招く可能性があるため、ここでは

使用しない。

## 参考文献

- 木坂基（1988）『近代文章成立の諸相』和泉書院
- 金銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』29、東北大学文学部『国語学研究』刊行会、pp.21-34
- 工藤嘉名子（1998）「読書支援システム『新書ライブラリー』における高頻度名詞の分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.2、pp.20-21
- 工藤嘉名子（1999）「橋渡しとしての日本語教育を考える－『新書ライブラリー』における否定表現の分析より－」『第8回小出記念日本語教育研究会』予稿集、pp.49-54
- 工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』3月号、至文堂、pp.45-52
- グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- 江田すみれ（1987）「『名詞+のこと』の意味と用法について－『について』とのかかわり－」『日本語教育』62、pp.68-90
- 鈴木庸子（1998a）「日本語学習者を対象とした読書支援システムの開発」『文部省科学研究費補助金重点領域研究「人文科学とコンピュータ」1997年度研究成果報告書』、CD-ROM版
- 鈴木庸子（1998b）「上級日本語読解教材『新書ライブラリー』の表現調査」『情報処理学会研究報告 人文科学とコンピュータ 38.9』、pp.87-94
- 坪根由香里（1994）「『もの』『こと』『の』に関する考察－その意義素を求めて－」、未公刊修士論文、南山大学
- 坪根由香里（1996）「『ことだ』に関する一考察－そのモダリティ性を探る－」『ICU日本語教育研究センター紀要』5、pp.45-62
- 原田登美、小谷博泰（1991）「日本語『もの』と『こと』」『甲南大学紀要文学編』84、pp.1-34
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

## 読書教材出典

中根千枝『タテ社会の力学』、中根千枝『タテ社会の人間関係』、井上忠司『まなざしの人間関係』、飯田経夫『「ゆとり」とは何か』、黒井千次『働くということ』、山田雄一『稟議と根回し』、野元菊雄『敬語を使いこなす』、井上昌次郎『睡眠の不思議』（すべて講談社現代新書）

（国際基督教大学 日本語教育課程）